

○布施谷節子* 高部啓子**

(* 和洋女大、**実践女大)

1998年の学習指導要領の改訂により、家庭科で被服製作に費やせる授業時間数が減少することが懸念される。そのような状況下で日常生活での被服製作技術の必要性や技術力を知ることが、被服教育に対する国民的なコンセンサスを得るために、また、各学校段階で必要な技術を精選する上で必要なことと考える。そこで、1998、1999年に、首都圏の女子短大生306名とその両親をを対象として、アンケート調査を行った。アンケートの内容は、縫製技術や被服の補修技術、被服製作品に関して、自分の現在または近い将来における必要性と、現実にそれができるかどうかについて、また、それらの技術を小・中・高校のどの段階で学習するのが適切と考えるかについて、衣生活行動についての合計169項目である。主な結果は次のようである。

①学生、母親、父親ともに、全般的に、必要だと考える技術は、現実に自分でできるものであり、不要とするものはできないという傾向であった。②日常生活で必要な技術は、学生・母親ともに、手縫いの基礎的な技法（なみ縫い、返し縫い、まつり縫い、ボタン・スナップつけ）とミシン操作、袋物・カバー類の製作であるとしていた。③服作りについては必要としていなかった。母親は、現実に簡単な服作り（子供服、パジャマ、スカートなど）は、やればできるとしているものの、必要性を認めていなかった。④父親はワイシャツや上着のボタン付けは必要で、やればできる技術だとしていたが、ほころびや裾の補修、ミシンの操作は必要ではないし、できないとしていた。⑤学校段階別の技術学習の適時性については、学生・母親ともに、手縫いの基礎技法やミシンの操作は小学校で、簡単な衣服の補修は中学で、簡単な衣服製作は高校で、手の込んだ製作は大学・専門学校がよいとしていた。学生は、大学での学習に多くを期待しているが、母親は中学・高校でより多く学習してほしいと考えていた。